

# 世界で一番の贈り物

マイケル・モーパール  
佐藤見果夢 訳

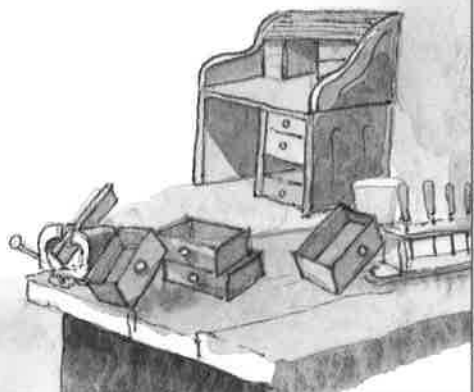
その机を見つけたのは、ブリッドポートのがらくた屋の店先だった。

「十九世紀初期の品で、オーク材ですよ。」

店の人は、そう言って勧めた。ずっと前から、そんな蓋の付いた机が欲しかったんだ。でもたいていは値段が高すぎて、手が出せなかった。

その机は、ひどいありさまだった。巻き上げ式の蓋は壊れているし、一本の脚にはへたくそな修理の痕がある。おまけに、横つちよが焼け焦げていた。

おかげで、たいした金額じゃなかった。それに、僕ならその机を元通りに直せるような気がした。もちろん、やってみないとわからない。でも念願のロールトップデスクを手に入れるチャンスじゃないか。そう考えて店の人に代金を払うと、その机をガレージ奥に運び込んだ。そこが僕の



作業場だ。

修理を始めたのはクリスマス・イヴだった。イヴには家に親戚の連中が集まって、大騒ぎをしていた。だから、しばらく一人になりたかったんだ。

まず、巻き上げ式の蓋を外した。次に、引き出しを一つずつ外していった。始めてみてわかった。これは思ったより大仕事になりそうだ。あちこちの板が割れている。どうも水をかぶったらしい。火と水の両方に痛めつけられたんだな。最後に一つ、どうしても開かない引き出しがあった。なだめたり、すかしたり……いろいろやってみたが、びくともしない。

こうなったら、力づくで開けるよりしょうがない。げんこつで、思いつ切りたたいた。すると引き出しが、ぼんと飛び出してきて、その下に小さな空間が現れた。秘密の引

き出しだったんだ。

中に何か入っているようだった。手を突っ込んで取り出してみると、それは黒い小さなブリキの箱だった。箱の蓋に、便箋を切った紙がテープで貼り付けられていて、そこには、震える字でこう書いてあった。

「ジムからの最後の手紙。一九一五年一月二十五日受け取り。私と共に埋葬のこと。」

むやみに開けちゃいけない。そうわかっているながら、箱を開けていた。結局好奇心の強さが、良心のどがめを吹き飛ばしたわけだ。まあ、たいてい、そんなものだろう。

箱の中には、手紙が一通入っていた。宛名は「ドーセツト州ブリッドポート、カッパー・ビーチ十二番地、ジム・マクファーンソン夫人」

封筒から手紙を取り出して開いてみた。鉛筆書きの手紙で、最初に日付があった。一九一四年十二月二十六日、と。

いとしいコニーへ

私は今、とても幸せな気分で、この手紙を書いている。すばらしいことが起きたんだ。それを早く君に知らせたくてたまらない。

昨日の朝、我々は全員塹壕<sup>④</sup>の中で、ドイツ軍の攻撃に備えていた。クリスマス朝だった。辺りはしんと静まり返り、空気が冷たくさえ渡っていた。見たこともないくらい、それはそれは美しい朝だった。真っ白く霜が降りて、凍えるような、いかにもクリスマスらしい朝だった。

始めたのは我が軍。そう言えたらよいのだが、残念ながら違った。ドイツ軍の兵士から始めたことだ。

まず最初に、味方の兵士からの報告があった。ドイツ軍の塹壕で、白旗が振られていると。そのうちドイツ兵の大声が、無人地帯を越えて響いてきた。

「メリー・クリスマス、イギリスさん！ クリスマスおめでとうー！」

一同、耳を疑い呆然<sup>⑤</sup>とした。ようやく驚きが収まった頃だ。こちらの塹壕からどなり返すものがあった。

「こっちらから、メリー・クリスマス！ ドイツさん！」

それで、もう終わり。誰もがそう思った。ところがそのとき、ドイツ兵が一人立ち上がって、大きく白旗を振りだした。外套<sup>⑥</sup>姿を、すっかりこちらにさらして。

「おい、撃つんじゃないぞ！」と、我が軍の兵士の声。

撃つ者はなかった。すると、ドイツ兵が一人、さらにもう一人と、塹壕の上に加って行く。

「頭を下げる。畏かもしれん。」  
私は、部下の兵士たちに命じた。だが畏ではなかった。  
一人のドイツ兵が、頭の上で酒瓶を振って見せながら、こ  
う言った。

「今日はクリスマスだ、イギリスさん。こっちは酒もソー  
セージもある。どうだいいっしょにやらないか？」

気がつくとも十人ほどのドイツ兵が、両軍の戦線ではさまれた  
無人地帯に向かって、ぞろぞろ歩いてくるところだった。しか  
も、ライフルを持たずに。

最初に立ち上がったのは、若いモリス二等兵だった。

「行きましょう。何をぐずぐずしているんです？」

もはや、止められるものではなかった。私は将校だ。その場  
で、やめさせるべきだったかもしれない。でも、そんな気には  
全くなれなかった。

見ているうちに、無人地帯に向かって両軍の兵士たちが、  
ゆっくり歩み寄っていく。グレーの外套とカーキ色の外套が、  
真ん中でいっしょになった。

私もそこにいた。そう、戦争の最中に我々は、つかの間の平  
和を作りだしたのだ。この私も、そのうちの一人だった。

ドイツの将校が、私の所にやって来て、手を差し伸べた。そ  
の男と、目を合わせたときの気持ちといったら、コニー……。

ら、ドーセットへ行ったことがないのがわかってきた。イギリ  
スについての知識は、学校で学んだのだそう。それから、英  
語の小説をよく読むとも言っていた。好きな作家はトーマス・  
ハーディ。愛読書は「狂おしき群れをはなれて」だど。  
それでなんと、この荒れ果てた無人地帯で、小説の主人公  
バスシバや、牧夫のオウク、美男子のトロイ軍曹、さらにドー  
セットの丘や村、牧場の話に花を咲かせた。彼には奥さんと、  
生まれてまだ六か月の息子がいるそう。

見回すと、無人地帯は、カーキ色とグレーが入り交じった塊  
で、いっばいだった。交換したタバコをふかし、笑い合い、話  
し合い、酒をくみかわし、食べ物に分け合う兵士たち。コニー、  
君がクリスマスのために焼いてくれたケーキを、ハンス・ヴオ  
ルフに、ふるまってやったよ。こんなにおいしいマジパンは、  
食べたことがないと言うから、コニー、私も同感だと言った。  
彼とは何でも意見が合うんだ。敵だというのにね。コニー、ま  
ず考えられないようなクリスマスパーティーだった。

そのうち誰かが、サッカーボールを持ち出した。二色の外套  
が交じり合って、両サイドにゴール代わりの棒を立てた。無人  
地帯の真ん中で、ドイツ対イギリスのサッカーの試合が始まっ  
た。ハンス・ヴォルフと私は応援に回った。手をたたいたり、  
足を踏み鳴らしたりしながら。そうしないと、寒くていられな

温かい握手をかわし、その手を握った

ままにして、彼は話しかけてきた。

「私はハンス・ヴォルフ。生まれは  
デュッセルドルフだ。楽団でチェロを  
弾いている。クリスマスおめでとう。」

こちらからも挨拶を返した。

「ジム・マクファーン大佐だ。クリ  
スマスおめでとう。私はドーセットで、  
学校の教師をしている。イギリスの南  
西部だ。」

「ああ、ドーセットね。その辺りのこ  
となら、よく知っているよ。とてもよ  
く知っている。」

彼はそう言って、ほほえんだ。

我々は、私を持ち出した支給品のラ  
ム酒で乾杯し、ハンスが持ってきた  
ソーセージを食べた。とてもうまくっ  
たよ。それから、互いに語り合った。

コニー、どんなに夢中で語り合ったか  
しれない。ハンスは、なかなかきれ  
いな英語を話した。ところが話の様子か

かったから。二人のはく息が、目の前  
で混ざり合った。ハンスも、それに気  
がついて笑った。

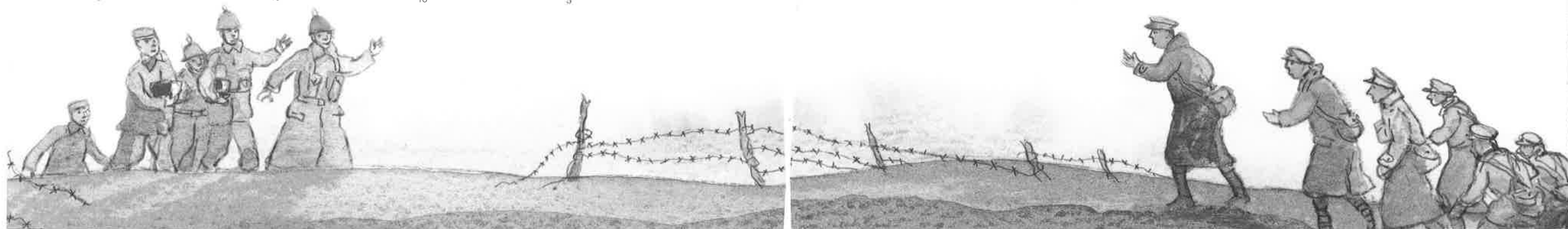
しばらくして彼が口を開いた。

「ジム・マクファーン、この戦争を  
終わらせる方法がわかったよ。サッ  
カーの試合で、勝負を決めればいい。  
サッカーなら、誰も死なずにすむ。親  
を失う子もない。夫を失う妻もない。」

「グリケットにしてくれないか。それ  
なら、イギリス勢のほうが勝てそうだ  
から。」

そんなことを言って、笑い合いなが  
らサッカーの試合を楽しんでいた。だ  
がコニー、残念ながら二対一でドイ  
ツチームの勝ちに終わった。しかし、ハ  
ンス・ヴォルフが、こう慰めてくれた。  
イギリス側のゴールのほうが、ドイツ  
側より広かった。だから公平ではな  
かったんだと。

楽しい時間は、またたく間に過ぎて



しまった。サッカーの試合が終わる頃には、酒もケーキもソー  
セージも、とっくになくなっていた。もう、終わりにするより  
しようがないとは、誰もがわかっていた。私はハンスに元気で  
と言ひ、早く家族のもとに帰れるようにと言った。この戦争が  
終わって、みんなが故郷に帰れるよう願っている。

「兵士は一人残らず、そう願っているさ。どちらの軍の兵士も。」

ハンス・ヴォルフが、そう返した。

「じゃあ、元気でな、ジム・マクファアソン。今日のことは忘  
れないよ。君のことも忘れない。」

彼は私に向かって敬礼すると、ゆっくり戻っていった。まる  
で別れたくないとでもいうように。一度だけ、こちらを振り向  
いて手を振った。そしてドイツ軍の塹壕に戻る何百人というグ  
レーの外套の兵士たちの一人になった。

その晩、地下壕に横たわった我々の耳に、ドイツ兵のクリス  
マスキヤロルが響いてきた。ドイツ語で歌う見事な「きよしこ  
の夜」だった。こちらでも声を張り上げて「羊飼いたちが」を歌  
い返した。しばらくの間、両軍が代わる代わる、幾つもクリス  
マスキヤロルを歌い合った。やがて、いつのまにか歌声はとだ  
え、辺りは静けさに包まれた。つかの間とはいえ、思いやりに  
満ちた、心温まる時間がもてた。かけがえのない一生の宝物、  
そんなひとときだった。

人のことをきいてみた。

「ああ、あの人のことかい。」

スリッパをつっかけた年配の男の人が出てきて、そう  
言った。

「気のいいおばあさんだよ。もつとも、少々衰えてはいる  
が、あの年だもの、しょうがないだろう？ 百一歳だもの。  
火事で家を焼くまでは、ここに住んでいたよ。なんて火事  
になったかは、わからずじまいさ。たぶん原因はろうそく  
の火だろうな。電気を使わずに、ろうそくをつけていたか  
ら。電気代が高すぎるって、いつも言っていたよ。うまく  
消防隊が間に合って、あのおばあさんを助け出したんだ。  
今は施設に入っているよ。町の向こう側、ドーチェスター  
通りにあるバーリントン・ハウスだ。」

バーリントン・ナーシング・ホームは、すぐに見つかっ  
た。玄関ホールは、色紙の鎖で、飾り付けられていた。ク  
リスマスツリーにも明かりがとり、そのてっぺんで天使  
の人形が傾いていた。

僕は、マクファアソンさんの知り合いで、プレゼントを  
届けにきたと言った。

食堂ではちょうど、紙の帽子をかぶったおじいさん、おば  
あさんたちが集まって、クリスマスキヤロルの陽気なナン

いとしいコニー。来年のクリスマスには、この戦争も、ただ  
の遠い思い出になっていることだろう。今日の出来事で、ど  
ちらの軍の兵士も、どんなに平和を願っているかがよくわかっ  
た。君のもとに帰れる日が、もうすぐ来る。私は、そう信じて  
いる。

愛を込めて、ジムより

手紙を畳んで、そっと封筒に戻した。手紙を見つけたこ  
とは、誰にも言わなかった。誰かの大事な場所に、勝手に  
踏み込んでしまった。そんな後ろめたさを自分の胸にしま  
い込んだ。たぶんそのせいだろう、その晩はどうしても眠  
れなかった。朝までには自分のやるべきことを、すっかり  
決めていた。

僕は口実を作って、みんなと教会には行かないことにし  
た。その代わり、ブリッドポートへ車を走らせた。ほんの  
数キロ先だもの。そして、犬と散歩中の子供に聞いた。

「カツパー・ビーチって、どこ？」

十二番地の家は、焼け焦げた残骸になっていた。屋根  
はぱっくり口を開け、窓という窓は破れて板が打ち付けて  
あった。僕は、隣の家の戸をたたいて、マクファアソン夫

パー「ウェンセラスは、よい王様」を楽しげに歌っていた。  
みんなと同じ紙の帽子をかぶったヘルパーさんが、僕を  
大喜びで迎え入れ、クリスマスには付き物のミンスパイマ  
でごちそうしてくれた。ヘルパーさんは、並んで廊下を歩  
きながら、

「マクファアソンさんは、みなさんとは別の所にいます。  
今日は少し、元気がないようだから、静かに休まれたほう  
がいいかと思ひましてね。あの方は、ほら、身寄りがな  
いでしょ。お見舞いもなかったんですよ。だから、あなたの  
お顔を見たら、とっても喜ぶんじゃないかしら。」

着いた所は温室で、柳細工の椅子が幾つかと、鉢植えが  
たくさん置いてあった。ヘルパーさんは、僕をそこに残し  
て戻っていった。

一人のおばあさんが、車椅子に座っていた。両手を膝に  
そろえて。小さくまとめてピンで留めた髪は、真っ白だっ  
た。おばあさんは、外の庭を一心に見つめていた。

「こんにちは。」

僕が声をかけると、振り向いて、ぼんやりとこちらを見た。  
「クリスマスおめでとう、コニーさん。実は、これを見つ  
けたんです。あなたの物ですよ。」

そう言っている間、コニーさんは、僕の顔から目を離さ

ない。僕はブリキの箱を開けて、手紙を渡した。そのときだった。コニーさんの目にはつきり、光がともった。顔中に喜びがあふれ、輝き始めた。

僕は、ロールトップデスクを買ったことから始めて、どうしてこの手紙を見つけたことになったのか説明した。それなのに、僕の言葉など少しも聞いていないようだった。

しばらくの間、コニーさんは黙ったまま、ただ指先で優しく手紙をなでていた。

そのうち、すつと片手を伸ばしたと思うと、僕の手を取った。目には、涙があふれていた。

「あなた、そう言ったものね。クリスマスには帰るって。ねえ、あなた。どうとう帰ってきてくれたわ。何よりうれしプレゼントよ。さあジム、そばに来て。ここに、座って。」

10

5

僕が隣に座ると、コニーさんは、すつと、僕の頬にキスをした。

「ねえ、ジム。私、この手紙を毎日読み返していたのよ。あなたの声が聞こえる気がして。手紙を読んでいると、あなたが、そばにいるようだった。やっと、帰ってきてくれたのね。あなたの手紙、読んでくださる？ 私に読んで聞かせてくださる？」

ねえジム、もう一度、あなたの声が聞きたいの。あなたの声、大好きよ。それから、お茶をいれましょうね。クリスマスケーキを焼いたのよ。マジパンをたっぷりかぶせたわ。だってあなた、マジパンがとってもお好きだから。」

10

5

マイケル・フォアマン・絵

## 注

- ①ブリッドポート＝イギリス、イングランド南部に位置するドーセット州の町。  
 ②ロールトップデスク＝前面に巻き上げ式の蓋の付いた書き物机。蓋を開くと、机になる。  
 ③一九一四年十二月二十六日＝この手紙は、第一次世界大戦下の戦場で迎えた初めてのクリ

スマスについて書かれたもの。第一次世界大戦は、ドイツ・オーストリアなどの同盟国側と、イギリス・フランス・ロシアなどの連合国側との戦争で、一九一四年から一九一八年まで、ヨーロッパが主な戦場となった。  
 ④塹壕＝敵の砲火から兵員などを防護するため、地面を掘り、土嚢などを積んで造った穴や溝。  
 ⑤無人地帯＝向かい合って動かずにいる軍隊の

- 間にある、どちらの支配下でもない中間地帯。  
 ⑥外套＝防寒などのため、衣服の上に着る衣類。オーバーコート、マントなど。  
 ⑦将校＝軍隊の階級で、一般の兵士や下士官に対し、少尉以上の幹部の総称。  
 ⑧トーマス・ハーディ＝一八三〇―一九〇六 イギリスの小説家・詩人。代表作「テス」。  
 ⑨「狂おしき群れをはなれて」＝原題「Far from